BUILT ON

小柳建設と街の人たちをつなぐ
CSRレポート2014

人間の手が、
街と自然にできること。

BUILT ON
発行・編集 （2014年4月1日発行） 小柳建設株式会社 〒955-0047 新潟県三条市東三条1-21-5 TEL 0256-32-0006

亘理・山元農地海岸特定災害復旧事業
鳥の海導流部災害復旧工事

守れ鳥の楽園。津波が運んできた土砂を浚渫（しゅんせつ）、湖に流れを取り戻す。

全長1700メートル。湖の中にある水の流れ「澪筋（みおすじ）」を復活させる。

宮城県と福島県を流れる阿武隈川の河口。全長239ｋｍにも及ぶその長さは、東北では岩手県と宮城県を流れる北上川に次いで2番目の長さを誇る。太平洋に注ぐ直前、湾状に窪んでいる場所が鳥の海と呼ばれる湖である。その名称の通り、多くの野鳥が集まる。休日ともなると多くのアマチュア写真家たちがシャッターを切る。

「澪筋は、川や湖の中に実際に水が流れている道筋のこと。津波による大量の土砂によって埋まってしまった澪筋を取り戻し海岸保全施設の稼働を円滑にするのが今回の浚渫（しゅんせつ）工事の目的です。また、鳥の海に流れを取り戻すことが水質改善に繋がり、多くの魚や鳥が住みやすい自然豊かな環境を取り戻せればと、切に願います。今回難しいのが、水深が無いうえに1メートル以上の干満差があるため、施工手順を間違えると大きなロスに繋がります。その為、施工検討会を開催し沢山のアドバイスを頂き、工事を進めています」（小柳建設（株）／井出光）。

今回の工事は、鳥の海という大きな湖に長大な澪筋を浚渫する。その為、普通に測量を行っていては、膨大な時間を費やすと共に誤差が大きく生じる。小柳建設では浚渫船にマシンガイダンスと呼ばれるGPS機能を搭載。広い湖で浚渫船の現在地を把握し、土砂をすくい上げる際の場所、深さまで把握し、掘り進めている。また、実際に土砂を掘削するバックホーには、チルトセンサーを付け、水の中でのバケットやアームの位置、角度をオペレーターがモニターで常に把握できるようにした。これらを搭載することで、掘る量を適切に管理することができる。しかし、鳥の海は干満の差で、湖面の高さは1日の中でも大きく変わる。湖面の高さを常に考え、そこからどの程度まで土砂を掘削するか。極めて繊細な職人の仕事が求められる。

今回はとにかく面積が広い。掘削する深さの管理が工程に大きく影響します。又、土砂の仮置き場にも制限がある為、掘削する深さの管理を厳しくする必要があります」（井出）。繊細な作業を求められる浚渫船を操るオペレーターの田代氏はこう話す。「浚渫船は川底の環境や様々な施工条件に合わせてつくりあげます。作業をやっていると思わぬ原因で故障が起きることがある。それを突き止めて自分たちで修理も行います。すべてオーダーメード。掘削の高さ制限がありますが、GPSも付いているので十分対応できます」（小柳建設（株）／田代徹也：浚渫工 優秀施工者新潟県知事表彰受賞）。

掘削した土砂は、5台の大きなコンプレッサーを用い空気圧で圧送される。全長1500メートルのパイプラインが鳥の海に蛇行する。3・7㎥の土砂が、約5分ほどで陸へと運ばれていく。「浚渫できる距離は1日で30メートル、500㎥の土砂を掘削します。最終的な浚渫の距離は1700メートル。ここだけ考えれば、3か月くらいで終えられそうですが、実際は湖底の調査から、浚渫船の組み立てまでに相当な準備を行ってから浚渫作業が始まります」（井出）。

浚渫工事で独自の技術を持つ小柳建設は、これまでも皇居外苑の千鳥ヶ淵をはじめ、日本全国の多くの川や湖の浚渫を行ってきた。今回は震災の被害からの復旧工事。井出、田代や他スタッフ一同（佐藤、佐野、関根、小野塚）も「復興に少しでも貢献できれば」と声を揃えた。

井出 光
小柳建設（株）環境保全事業部/事業部長

浚渫船の土台になる台船は、通常縦13メートル、横3メートルの台船を8隻使用していました。しかし今回は掘削の幅が15メートルしかないので、1つあたり縦9メートル、横2.5メートルのコンパクトな台船15隻で対応。どのような現場条件に合わせた浚渫船を組み上げる。当社の最大の強みです。

田代 徹也
小柳建設（株）浚渫工事課/係長

今回は海の水も混じっているので、塩によるトラブルも想定しながら進めています。津波の影響だと思うのですが、砂の下にヘドロや採石から割栗石のような石まで在り、土質が一様でないのも今回の工事の特徴です。

全長1.5キロのパイプライン。ここを泥が通り岸まで運ばれる。

水底の土砂を掘削しパイプラインで空気圧送する。

工事名：亘理・山元農地海岸特定災害復旧事業 鳥の海導流部災害復旧工事　発注者：農林水産省東北農政局　工期：平成25年8月8日～平成26年3月17日

CONTENTS

04
川、湖、地下水。
流れ出る水を、コントロールせよ。
大震災の津波の被害。湖と川の水位を調節する樋門の建設。それは水との戦いだった。

07
豪雪集落の日常を取り戻すため。吊り橋建設は、天候との戦いだった。
大雨による基礎部の水没4回を乗り越えて、地元待望の吊り橋を架ける。

10
新潟一の広さを持つ学校を
5万人でつくり上げるリーダーシップ。
町家をイメージしたデザイン性の高い建物。職人を束ねる力が良い施工を生み出す。

12
自然を守りながら、人の暮らしを守る。豪雨によって崩壊した地域を蘇らせるために。
「これほど凄まじい現場は見たことがない」。未踏の災害復旧にチームワークで挑む。

14
人々の念願だった「あと1m」。
1日でも早く安心できる堤防をつくる。
チームワークで、未来のために今できる対策をする。

16
土台工事67回。土砂で中断13回。S字カーブトンネルの難工事。
護摩堂山のあじさいまつりに訪れるたくさんの人たちのために。

19
施工の力で、デザイン性と過ごしやすさは両立できる。
工事の影響、建物を使用する人たちへの想像力が施工の質を上げる。

21
人生最大の買い物だからこそ、「満足かどうか」とことん突き詰める。
お客様のこだわりには、それ以上のこだわりを持って応える。

23
どんな細かいプロセスも、人の生活を守る耐震工事の一部だ。
花見シーズンを避けた工期、ダンプトラックの泥で道路を汚さない工夫。

26
街に、人に貢献するための社内での取り組み

1

亘理・山元農地海岸特定災害復旧事業 橋本樋門復旧工事

川、湖、地下水。流れ出る水を、コントロールせよ。

工事名：亘理・山元農地海岸特定災害復旧事業 橋本樋門復旧工事　発注者：農林水産省東北農政局
工事期間：平成25年2月8日～平成26年3月26日

大震災の津波の被害。湖と川の水位を調節する樋門の建設。それは水との戦いだった。

ただ荒野の広がる土地。以前はどんな区画だったのかもすでにわからなくなっている中で、時折ぽつんと民家がある。しかしもうそこに人は住んでいない。運良く建物は残ったが、海水が浸水したせいでとても人が住める状態ではないと言う。ここ宮城県亘理（わたり）町は、仙台市から車で1時間ほどの海岸線に近い町。東日本大震災のとき、7メートルの津波が押し寄せ、多くの人々の命と財産を奪った。街の人々は、海岸線の松林の上から迫り来る津波を見て、急いで高台へ逃げたと言う。その海岸線から窪むようにしてできている湖、「鳥の海」そこにある5つの樋門（ひもん）のうちのひとつの復旧工事を請け負っているのが小柳建設だ。樋門は川からの水の排水を担い、高潮の際には海からの水が侵入しないようにゲートを閉めて水位を管理する。「私たちがつくっているのは、言ってみれば樋門の扉以外のすべて。樋門は見た目ではわかりませんが、意外と複雑につくられているので、細心の注意を払ってつくらなければならない。全体のコンクリート量のわりに手間がかかる。細かい仕事が求められるのです」（小柳建設（株）／髙田幸博）。

さらに、樋門の工事が難しいのは、水との戦いがあること。まず樋門の外側である鳥の海側を長さ11メートルの鋼矢板（こうやいた）で延長50メートルほど囲う。川からの水は土のうで仮の堤防をつくり、その中にある水をくみ出す。樋門の建設現場から水を排除しなければ、コンクリートは打てない。通常1週間ほどで水は抜けるが、ここで大きな問題に直面した。

「地下水が思ったよりも高かったんです。少し掘っただけでどんどん水が出てくるからなかなか水が抜けない。だからこの工事を管轄する東北農政局と話し合い、簡易的な井戸を掘り、5メートル地下から水を引き上げるウエルポイントという工法を採用しました」（小柳建設（株）／玉木陽祐）。そこから1週間くらいして水が引き、やっとのことで工事を開始することができたと言う。

周囲はいたるところで復旧工事が行われている。高田はまさか自分が復旧工事に携わるとは、と振り返った上で、「復興に携われた事が誇り」誇らしげに言う。玉木は茨城県北茨城市の防潮堤の復旧工事以来2件目。「今回も同じようにしっかり工事を完了させたい」。震災復旧という大きな使命を担う工事。二人の顔は、充実感で溢れていた。

髙田 幸博
小柳建設（株） 土木第一工事部／係長

樋門づくりは繊細な仕事。この部分を担当するのは型枠大工という職人さんなのですが、通常の型枠と違って、時間がかかりますから、十分な作業期間を持てるよう工程管理をしています。

玉木 陽祐
小柳建設（株） 土木第三工事部／主任

新潟を出て工事をする場合、地元の協力会社と仕事をしていくわけですが、意外と難しいのは言葉を覚えること。ベテランの職人さんほど方言を使いますから、方言を覚えることでコミュニケーションをスムーズにできます。

津波の力で折れ曲がった手すり。

工事のために架けた仮橋。

地下水を吸い上げるウエルポイント。

湖の水が入らないよう、鋼矢板で囲う。

現場では工事で出た排水を浄化し、川へ戻す大型機器も準備。

被災地のために。言葉や仕事の進め方が違っても、使命感は同じだった。

土木建築一筋35年。宮城県出身の渡部氏は全国の至る場所で工事に携わってきた。あの東日本大震災の日も、富山でダム建設工事の最中だった。テレビで状況を確認して驚き、連絡するもしばらくはつながらず、家族からのメールでなんとか無事を確認したと言う。今回の工事に入る前は、仙台市の地下鉄建設に携わっていた。

「やっぱり自分の地元の工事だからね。震災復旧ということもあるし、使命感もあるから、自然と力は入るよね」と渡部氏。今回の工事については「特別、樋門だからって難しいことはないけど、髙田さん（小柳建設）の言うように、複雑な構造をしているから、型枠をつくるのに時間はかかる」と話す。この日も、亘理町周辺は至るところで復旧工事が行われていた。ざっと数えただけで周囲には20ものクレーン車が動く。仕事は山ほどある。しかし、どの建設会社も受けられる仕事のキャパシティを超えてしまっている状態だ。小柳建設のように、宮城県以外の建設会社が請け負う場合も多くあるが、それでも間に合ってはいない。「仕事があるのはありがたいよね。でも普段なかなか一緒に出会わない者同士が一緒にやっているから、勝手が違う。方言もなかなか通じないしね（笑）。だけど髙田さんも玉木さんも一生懸命。被災地の役に立とうという気持ちが伝わってくる。細かくコミュニケーションを取ってくれるから、現場がやりやすいように工期を考えてくれる。助かっていますよ。工事前、髙田さんも、玉木さんも必死で協力会社を探したはずです。そこで俺たちは出会った。これも縁ですよね」（渡部氏）。

少しずつ、元の風景を取り戻すための作業が続いている。渡部氏が35年培ってきた現場での経験。その知恵を地元での復旧工事に注ぐ。

協力会社 株式会社 杜都工業　渡部 光正さん

2

道災第2号 市道塩野渕線塩野渕1号橋橋梁災害復旧（平23災第2936号上部工・下部工）工事

豪雪集落の日常を取り戻すため。吊り橋建設は、天候との戦いだった。

大雨による基礎部の水没4回を乗り越えて、地元待望の吊り橋を架ける。

ここ三条市塩野渕地区は、冬は3メートルもの雪が積もる豪雪地帯。どの家も必ず自前の除雪機がある。早ければ11月末頃には雪が舞い、12月には本格的に雪が降りはじめると言う。そのため、今回の工事は是が非でも11月中には終わらなければならなかった。平成23年7月新潟・福島豪雨で流された吊り橋。人だけが渡れる橋ではあるが、昭和38年に建設されて以来、地元の人たちの重要な生活道となっていた。その大切な吊り橋が自然の力でいとも簡単に流されてから、1年半以上。「難しかったのは、橋の土台となる2脚の橋脚建設。川が流れている中で、橋脚を建てる部分を土で堤防をつくって囲み、中に入ってくる水をポンプで吐き出す。水がなくなった上で、コンクリートを流し込んで、橋脚の土台になる部分をつくるんです。でも川だからどこからともなく、水はどんどん入ってくる。それをどう処理するか。ここが腕の見せ所です」（小柳建設（株）／山﨑恒昌）。

さらに工事を困難にしたのは、2013年7月末に起きた大雨。2年前ほどではないが、上流部分にある笠堀ダムと大谷ダムの2つのダムから100㎥／秒超える放流を行ったことで、橋脚周囲につくった囲いを簡単に超え、水没。水だけでなく泥なども橋脚の土台になる部分に入ってしまったため、それらをかき出さないと上に橋脚を建てることはできない。「大変だったのは、工事期間中、全部で4回、土台が水没してしまったこと。その度に作業員総出で、スコップを持ち、泥や砂利を取り除いていきま

工事前。ほんの一部を残して、流されてしまった吊り橋。

一部がまだ岸に残ったまま。近くで見ると自然の猛威の怖さが伝わる。

した。11月末までにすべての工事を完了するには1日もムダにできないですからね」（小柳建設（株）／田中利栄）。

悪天候の影響は、土台部分だけでなく、吊り橋そのものの建設にも影響を及ぼした。ボルト部分の塗装が11月からとなったが、晴れの日がなく塗装が延期続きに。雨を防ぐため、橋を丸ごとシートで囲い、ヒーターで気温を上昇させ、塗装が乾きやすくなる工夫を行った。その後も急ピッチで作業を行い、なんとか雪が本格化する12月中旬までに足場を撤去し、工事を完了することができた。

吊り橋は、周辺にある家の人たちのための生活道。失われた生活がこの吊り橋の完成によって戻ってくる。「若いときは、自分の手がけたものが目に見えるというのがやり甲斐だった。でも、何十年もこの仕事をやってくると、地元の人にありがとうとか、うれしいとか言ってもらえることもやり甲斐になってくる」（山﨑）。

影響の大小ではない。塩野渕の人たちの、失われた日常を取り戻すため。工事の使命は、まさにそこにあった。

山﨑 恒昌（右）
小柳建設(株) 土木第二工事部/作業所長

これまでたくさんの橋を川にかけてきましたが、吊り橋は今回が初めてでした。私は吊り橋の土台となる工事を担当したのですが、今回もまた、水との戦いでしたね。

田中 利栄（左）
小柳建設(株) 土木第一工事部/係長

雪が積もる前の完成が使命なので、計画した工程短縮のため協力会社、三条市の担当の方と密にコミュニケーションを取りました。時には工事手順を変更することも。その時は必ず会って、お互いが納得できるよう図面を見ながら話すようにしていましたね。

本格的に雪が降り積もる前に急ピッチで完成。

工事名：道災第2号 市道塩野渕線塩野渕1号橋橋梁災害復旧（平23災第2936号上部工・下部工）工事　発注者：新潟県三条市
工事期間：上部工／平成25年4月20日～平成25年12月25日　下部工／平成24年12月27日～平成25年10月31日

スケジュールも、クオリティも。すべてにこだわるプロ集団。

昭和39年に栃木県で生まれた製鋼繊維ロープを専門に扱う東綱橋梁（株）。今回のような吊り橋架設工事の実績を多く持つ。これまで多くの橋梁工事に携わってきた同社の田嶌勇氏はこう語る。

「私たちは、橋の上部工を担当させて頂きました。通常の橋梁工事は、橋を組んでクレーンに載せて設置しますが、吊り橋工事はすべての部材をワイヤーから吊った状態で施工します。最終的にすべての部材がつながることで、はじめて橋が完成するのです。今回の現場代理人である田中さんは、吊り橋工事が初めて。その分、仮設工事のやり方や順番を綿密に打ち合わせしながら、進めていきました。小柳建設の方々は、とにかく『手を抜かない』人ばかり。全体の工程スケジュール管理もきちんとしてくださるし、指示も明快で仕事がやりやすかったですね」。

予期せぬ気候の変動は、工事のスムーズな進行に影響を及ぼす。この現場では、作業予定が台風に阻まれることが多々あった。河川に架ける橋梁工事であるため、雨によって水かさが増え、資材が流されそうになったこともあったという。しかし、工期に影響はなかった。

「天候に悩まされることが多い現場でしたが、予定より早く終えられる見通しが立っています。すごいことですよね。だからと言って、工事のクオリティが低いかと言うと、むしろ逆なんです。小柳建設の田中さんは、全く妥協しない。橋梁を塗装していたときの話です。普通なら下塗りは2回行えばいいのですが、ボルトの先端部分だけ少し膜圧が足りていませんでした。それを見た田中さんは、もう一度塗り足す指示をしました。ボルトの先端なんて普通は気にしません。ですが「念には念を」とその作業をやることによって、確実にサビが発生するタイミングが遅くなります。20年後とかの将来を見据えて品質にこだわっていると思いましたね」（東綱橋梁（株）田嶌勇氏）。

現場で工事に携わるそれぞれのプロフェッショナルたちのこだわりや姿勢が、今回のような高品質な工事を生み出した。

協力会社　東綱橋梁 株式会社　田嶌 勇さん

3

三条市立(仮称)第一中学校区小中一体校建設 校舎棟 建築本体工事

新潟一の広さを持つ学校を5万人でつくり上げるリーダーシップ。

町家をイメージしたデザイン性の高い建物。職人を束ねる力が良い施工を生み出す。

中学入学とともに、いじめや不登校が増加する「中1ギャップ」。その解消を行うべく三条市が進めている小中一貫教育。昨年の一ノ木戸小学校の建設から引き続き、この第一中学校区小中一体校の校舎建設工事に関わるのが小柳建設だ。第一中学校区は第一中学校を始めとして、四日町小学校、条南小学校、南小学校が統合し、平成26年度よりひとつの校舎で小学校から中学校までの9年間を学ぶことになる。

「延床面積19,000㎡は新潟県内の小中学校あわせても、一番大きな規模となります。小中合わせて1500人の生徒が通う規模の学校ですから、工事に携わる作業員の数も工期中で延べ5万人ほどと、かなり大規模になります」(小柳建設(株)／川住直人)。1日当たりに200名もの人たちが関わっていることになると言う。建築はその工程によって専門性が高く、さまざまな協力会社や職人が関わることになる。職人たちは自分の持ち場が終われば、また次の現場へと行くことになるので、ほぼ毎日のように新しい職人たちが現場を訪れることになる。工事の全貌を見渡せているのは、現場代理人・川住ただ一人だ。「初めて現場に来てもらった職人には、必ず工事の当初の目的とか進捗スケジュールやこちらが期待することまで伝えます。あとは広い現場を毎日くまなく回って、一人ひとりに声をかけていく。見た目は機械がどんどん進めているようにも見えるんですが、結局それを操るのは人間。気持ち次第で出来栄えも変わってきます。モチベーションが高いほうが施工のレベルも上がるので、毎日のコミュニケーションを大切にしています」。川住曰く、「現場」で得た生の声を日々の進捗スケジュールに反映し、クオリティを上げながら、工期を進めていくことが大切だと言う。

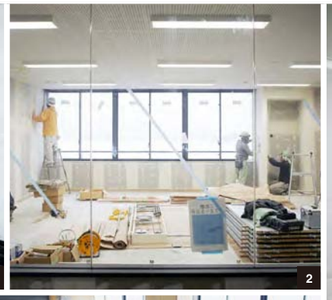
また今回の建築は規模の大きさも去ることながら、デザイン性の高さも目を惹く。地元・三条市に古くから残る町家をイメージした校舎、扉、窓、校内の案内板、図書館(メディアセンター)の家具に至るまでこだわりが感じられる。ここに通う生徒・児童がうらやましくなるほどの、デザイン・オフィスのような設計だ。「施工に入る前には、設計図面を見ながら、更に詳細な工事図面を書き上げていきます。設計図面では見えない、施工上の課題を洗い出すんです。例えばこのままでは、配管がどうしても見えてしまうなとか、照明やスイッチの位置が変わってしまうなとか。そのあたりを設計者と綿密に打合せながら、一緒に解決策を見つけていきます」(川住)。他にも、洗面台の高さは利用する人の観点から変更を提案している。小学校低学年の児童と中学3年生では当然身長差が大きい。川住は洗面台を、60センチ、70センチ、75センチと学年によって高さを変更することを提案した。使う人の立場に立って作り上げる。それは川住の変わらないスタンスだ。

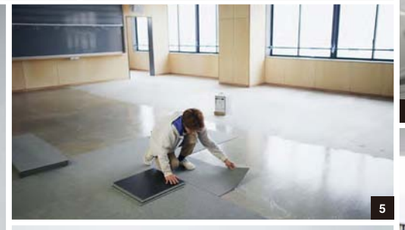
「昔、よく上司に『仕事は明るく、楽しく、カッコよく』と言われていました。シンプルな言葉だけど、突き詰めるとものすごく難しい。とくにカッコよくの部分。見た目だけカッコよくても、使ってみて、あれ使いにくいなあ、と思われたら工事した僕らは本当にカッコ悪い(笑)。使う人の気持になってとことん考え、その為のプロセスを見出す。それがプロの仕事なんです」(川住)。

川住 直人
小柳建設(株) 建築第一工事部/課長

今回は大規模な工事だったので、冬の間も工事は続きました。雪には苦労させられましたね。あらゆる手段を尽くして雪を溶かしながら、鉄筋コンクリートを作り上げていきました。

工事名:三条市立(仮称)第一中学校区小中一体校建設 校舎棟 建築本体工事　発注者:新潟県三条市　工事期間:平成24年1月26日～平成25年12月15日





①ちょうど下駄箱が置かれる付近。靴の多さが工事に関わる人数を物語る。 ②各教室では職人が急ピッチで作業を続ける。 ③洗面台は成長に合わせて高さを変えた。
④各階、各教室ごとにある校内サインにもデザイン性を重視。 ⑤音楽室。床を貼る作業。 ⑥同時に校庭の整備も急ピッチに進む。 ⑦学校の近くは民家。工事で出る音をできる限り抑えての作業が続いた。

4

遅場地区 災害関連緊急地すべり対策（土木）工事

自然を守りながら、人の暮らしを守る。豪雨によって崩壊した地域を蘇らせるために。

工事名：遅場地区 災害関連緊急地すべり対策（土木）工事　発注者：新潟県三条地域振興局　工事期間：平成24年6月15日～平成26年1月31日

「これほど凄まじい現場は見たことがない」。未踏の災害復旧にチームワークで挑む。

三条市遅場地区。山々の間に守門川が流れるこの自然豊かな場所を、自然の猛威が襲った。平成23年7月新潟・福島豪雨。これよって山が崩れ、その土石流が守門川へと流れる被害がもたらされた。下流には民家がいくつも立ち並ぶ。近隣住民の安全を取り戻すため、崩れた山の保全、河川の機能復活など、一刻も早い復旧が望まれた。

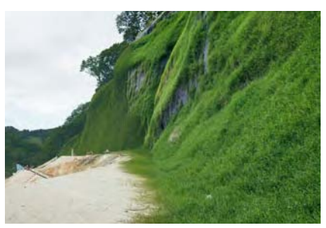
「発注者である新潟県の方も、初めて現場を訪れた時に絶句していました。『これほど凄まじい現場はかつて見たことがない』と。それくらい壊滅的な状況でした。山の一部が大きく崩れ落ち、木々はあちこちになぎ倒されていて、どこから手を付けていいのか分からない状態でした。まずは、重機などを搬入するための道路づくりから始めました。次に、川の水をうまく流すための排水管を設置する工事を行いました。そして谷止工（砂防ダム）の施工を優先的に行い、関連工事の進捗を中断することなく、降雨による二次災害の発生防止に努めました。土石流が下にある民家へ流れてしまうのを防ぐことが最重要ですから。私たちが担当する現場は、膨大な土石を移動することがメイン。1日に4台大型重機をフル稼働させました」（小柳建設（株）／蝶名林潤）。

現場代理人の蝶名林にとっても、これほど大規模な災害復旧工事は初めての経験だったという。この地域は冬になれば大雪が降る。雪が降ってしまうと、その間は工事を中断せざるを得ない。それまでに何としても工事を終えることが使命だった。災害現場は非常に広範囲に及んでいたため、4つの工事に分かれてそれぞれ工事を担当することに。1つの現場の作業が終わらないと、次の現場の作業が始められない。そのような状況下だからこそ、工期スケジュールを確実に守っていくために、現場間でのチームワークが求められた。工事は早朝7時から始まり夜の18時まで行われる。その中で蝶名林は1日の中で2回、必ず協力会社の現場責任者との打ち合わせの時間を設けた。朝と夕方のタイミングで、各現場の進捗状況の確認を行い、全体スケジュールの共有、それをもとに次の工事の段取りを行っていく。工事に携わる関係者全員が息を合わせることで、スケジュール通りでミスのない、安全な工事が実現した。

また、豪雨によって山間に突如出現した天然ダム。もともとあった多くの木々が雨水に浸り、枯れてしまうという被害も発生した。そこで、水路を地上につくり、流していく作業も行われた。被害を受けてしまった木々は、破砕機で粉々にして、法面に吹き付けるイソイル緑化工法に使用した。処分するのではなく、リサイクルして活かしていくことも、小柳建設が大切にする工事の方針だ。

「人間の生活はもちろん大切です。ですが、大地があってこその私たちの生活。自然を守りながら、人々の暮らしを守るために私たちの仕事があると思います」（蝶名林）。自然災害の復旧に努めながら「生命と自然の調和」をめざすべく、工事は今日も続いていく。

木の枝や根を細かく打ち砕くミキシングホッパー。



砕いた枝や根を法面に吹付け、緑化。
小柳建設の独自の技術が活かされている。

蝶名林 潤
小柳建設(株) 土木第二工事部/係長

山が崩れたところが現場なので、重機を置いて作業をする場所は地面が平らではありません。常に危険が伴う現場こそ、徹底した安全管理と周囲の人とのコミュニケーションが大切だと思います。

5

一級河川五十嵐川災害復旧助成事業堤防嵩上(高岡工区)工事

人々の念願だった「あと1m」。1日でも早く安心できる堤防をつくる。

チームワークで、未来のために今できる対策をする。

再び豪雨が襲った。もともと雨量が多い地域でありながら、カーブの多い特性を持つ五十嵐川。カーブした部分には勢いの増した水流がぶつかり、堤防を乗り越えていく。今回の現場も、平成23年7月新潟・福島豪雨の際に、堤防が決壊して今なお残骸の跡がある場所だ。川のすぐ近くには民家が8軒並んでいる。そこに住む地元の人々にとって自然災害は脅威であった。

「あと1m。堤防をあと1m高くするのが今回の工事です。ここで暮らす人たちの未来のために、今できる対策をしていくのです。工事期間中の2013年の8月にも大雨が降り、その時も堤防の半分くらいまで水位が上がりました。地元のみなさんにとっては、ここ数年間ずっと渇望していた堤防工事。1日でも早く工事を終えることが私たちの使命でした。施工の前に地元の自治会長へ挨拶に行くと『何かあったらいつでも相談に乗ります』と言って頂けました。非常に協力的で助かりましたね」(小柳建設(株)／村山宏樹)。

地元の人に歓迎されている工事である分、その期待に応えていかなければならない。1日でも早く工事を終わらせるために、まず立ちはだかった壁は「工事をはじめるための準備を終えること」だった。堤防を高くするという首尾一貫した目的はある。しかし、実際に作業を進めていると予期せぬ事態が起きる。

「私たちの担当する範囲は620mに渡り、工事の前に数量を正確に

工事名:一級河川五十嵐川災害復旧助成事業堤防嵩上(高岡工区)工事　発注者:新潟県三条地域振興局　工事期間:平成25年3月26日～平成26年2月13日

はじき出しています。ですが、例えば護岸を守るためのブロックを積む予定が、いざ掘ってみたら頑丈なブロックがあるのでやっぱりなくしたり、急きょ下流のほうは6000㎥掘り返さねばならなくなったり…その都度、図面を書き直して、数量を再びはじき出して、発注者と打ち合わせを行います。川幅は決まっているので、川を深くしたり、広げたりはできません。そういった制約もある中で、なるべく早く打ち合わせを行い、変更計画して、工事を進めること。それが一番大変でした。それでも、地元のみなさん、私たち工事業者、そして発注者が『1日でも早く安心できる堤防をつくる』という意思統一のもとチームワークを発揮したため、トラブルにもうまく対処できました。関係者(新潟県・地元・小柳建設)が連携することで、工事はスムーズに進むのです」(村山)。

環境への配慮も忘れない。620mの工事区間に合計で2000㎥もの土を盛った。掘り返したもとの土は、堤防に適さないものだったため、リサイクルするために他の工事へ送った。豪雨は自然現象なので、雨を降らないようにすることはできない。しかし、被害を最小限に抑えることはできる。そのために、今日もどこかで自然と闘う人たちがいる。

村山 宏樹
小柳建設(株) 土木第一工事部/課長

地元の方と話すと「1日でも早く堤防ができると嬉しい」という切実な言葉を頂きました。そのために、計画を早め早めに計画を立てて、トラブルに迅速に対応していきました。

6

町道〈1〉坂田・湯川3号線 五明寺トンネル修繕工事

土台工事67回。土砂で中断13回。S字カーブトンネルの難工事。

工事名：町道〈1〉坂田・湯川3号線 五明寺トンネル修繕工事　発注者：新潟県田上町　工事期間：平成25年5月27日～平成26年3月20日

護摩堂山のあじさいまつりに訪れるたくさんの人たちのために。

新潟市から南東へ30分ほど車を走らせると、新潟県南蒲原郡田上町に入る。ここには、6月になると約3万株のあじさいが咲き乱れる、標高274メートルほどの護摩堂山がある。麓から山頂までは徒歩で40分程度と、ハイキングコースとしても人気があり、例年、6月20日～1ヶ月間は、「あじさいまつり」が開催され、多くの人たちが訪れる場所だ。

2013年、このあじさいまつりが中止となった。これまで33回開催されている恒例行事が中止になるには、大きな理由があった。登山口へ続く最短ルートである五明寺トンネルの大規模改修工事。工事は10ヶ月にも及ぶ工期が予想されたため、迂回路は期間中、相当な混雑が予想される。訪れる人の安全を考えて中止を決定した。老朽化の激しいこのトンネルは、それだけ田上町にとって、数年来の懸案事項だった。

五明寺トンネルは、通常時の利用車両はそれほど多くない。一方通行のトンネル内は1車両が通るのがやっとの道幅であった。「あじさいまつりの時は、多くの人がこのトンネルを利用します。未然に事故を防ぐためにトンネルの土台から壁面に至るまで、大規模な改修工事が必要でした」（小柳建設（株）／小川誠一）。トンネルの壁面から地中へと延びるコンクリートの土台。その一部を壊し、ちょうど地上から1メートルのあたりで、両側の壁に鋼管製の切梁（きりばり）を渡す。こうしてトンネル全体の強度を維持しながら、地面の掘削を行う。頭上は鉄の柱。現場作業の感覚としては、トンネル内に、もうひとつトンネルをつくり、土台をつくりあげていく感覚だ。「トンネル内は緩やかなS字カーブを描いているので、壁にかける切梁の圧力も微妙に変えていく必要がありました。ゆえに3メートル分の作業をして、また切梁を渡し直して、その中へ入り、トンネルの下部を掘り進めていきました。トンネル全長で67回その作業を繰り返しましたね」（小川）。この工事の途中には、何度も大雨に降られ、掘削部分に大量の雨水や土砂が流入した。その数は13回にも及び、そのたびにバキュームで吸い上げる作業が発生した。しかも土砂や雨水は、コンクリートの強度に関わる重要な問題のため、無視はできない。

工事は、67回の下部作業を経て、やっとトンネルらしい上部の工事に移って行った。防水シートを壁面全体にかぶせて作業を進めていく。

「一見普通の防水シートに見えますが、実は建設用のしっかりとしたシート。雨水が入ってしまうと、強度を増すために壁に注入するモルタルに影響があり、トンネル全体の強度が落ちてしまう恐れが出てくる。こうして、いろんなプロの力が合わさって、トンネルができていくんです」（小川）。

今年の6月にはリニューアルした五明寺トンネルを利用して、たくさんの利用客があじさいまつりに訪れるだろう。

埃や塵が停滞しないようトンネル内に風を送る機械。

小川 誠一
小柳建設(株) 土木第二工事部/課長

トンネルの中にトンネルを作るのは初めて。工事はいろんな専門会社や職人が関わりますから、細かいことは彼らとよく相談してスケジュールを決めていきます。現場代理人という立場はありますが、あくまでフラットに接することを心がけています。

あうんの呼吸で、お互いの土木工事経験を、難工事に注ぐ。

今回の五明寺トンネル修繕工事は、堀内組とのＪＶ（ジョイントベンチャー）方式で行われている。ＪＶとは、異なる複数の会社同士がともに事業を行う方式で、建設業界ではごく当たり前の手法だ。小川（小柳建設（株）土木第二工事部・課長）とともに現場代理人として指揮を振るうのが、株式会社堀内組土木部の相田氏だ。「これまでいろんな土木工事をやってましたけど、トンネル工事は初めてだったんです。そのため工事に入る前は、専門書を読みあさって勉強しました。技術に関しては学ばなければいけないところはありますが、基本的な工事の進め方は一緒ですね」（相田氏）。

お互い初めて「タッグ」を組む工事ではあったが、初めてとは思えないほど、お互いを信頼し、「あうん」の呼吸で仕事が行われていると相田氏は言う。「例えば、朝夕はどちらともなく、その日の報告を行います。現場はどちらがどの場所を、という感じではなく、ふたりの眼でくまなく進捗を把握していきます。お互い土木畑ですから、その経験を尊重しつつ工事を進めていますね」（相田氏）

相田氏が一番気を配っているのは、やはり工事現場の基本、作業員の安全だ。長い工期の間には、大雨での工事中断など、予期しないことがたくさん起きる。そのたびに、職人たちとよくコミュニケーションをとり、どうすれば工期内に、安全に終えられるかのミーティングを繰り返す。「夜に雨が降ると、小川さんも私も、現場が心配になって朝早く見に来ちゃうんです」（相田氏）。

今回の工事はトンネルを支える土台を替え、上部は水の侵入を防止する防水シートを貼り、ＰＣＬ版でトンネルをつくり、その間にエアモルタルを注入する。

「これでより安全に、このトンネルを通行することができます」。相田氏は自分たちの工事について、少しはにかみながら優しく語った。

協力会社　株式会社 堀内組　土木部／相田 洋さん

7　ワークセンターしらはす新築工事

施工の力で、デザイン性と過ごしやすさは両立できる。

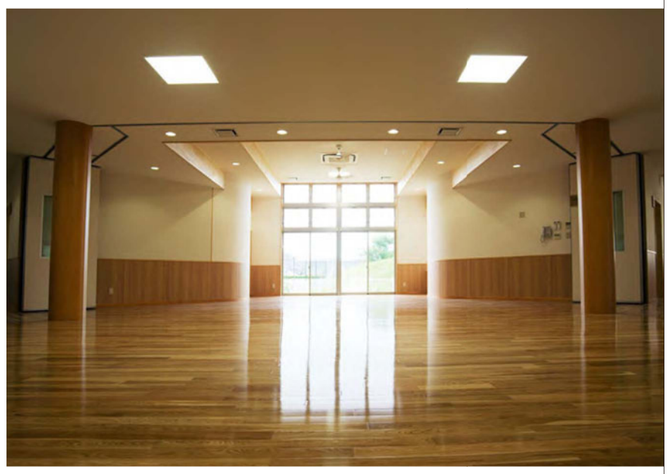
工事の影響、建物を使用する人たちへの想像力が施工の質を上げる。

「ワークセンターしらはす」は、新潟市の南、雄大に流れる信濃川近くにある。障がいを持った方々が、織物やお土産品、例えば南区白根の名物である六角凧のミニチュアなどをつくり、実際に販売も行っている施設だ。もともとは閉校した小学校を利用して作業が行われていたが、老朽化に伴い、建て直しが行われることになった。新たな建物は、デザイン性の高い建物。ゆえに、高い施工力が求められる現場だ。この現場を任されたのが、自らも設計ができる明村（小柳建設（株））だ。「設計図面を頂くと、私たちはさらに詳細な工事図面を作成していくのですが、その時点で問題になりそうなことがたくさん出ていましたね（笑）。鉄骨がとり合わない可能性があったり、あまりに材料が集中する場所があって、納まりがつかなくなりそうだったり。至るところで複雑な計算が必要でした」。今回の建物は、幾つもの四角形が複雑に組み合わさり、内装では曲線を多様する場所も多い。ゆえに実物大で合わない部分が予想され、設計者、職人、明村の3者で細かくコミュニケーションをとらなければならなかった。

また今回の建物は、小柳建設が内装や電気工事、配管まで建物からまとめて請負っていた。通常、それらは別々で発注されることが多いが、まとめて請け負っていたからこそできた大きな工夫ができたと言う。「分離発注された場合は、建物がある程度進捗してから、いろんな工事が入るわけで、施工の状態に合わせてどうしても無理な配線、配管になってしまいがちです。今回はデザイン性を保つことも大事でしたから、外壁面にバランスのとれない配管を出す訳にはいかない。着工前から、各協力会社とコミュニケーションをとることで、機能的で美しい配線や配管をすることができた。これで後々、メンテナンスの手間が省けるはず。それは建物の寿命を伸ばすことにもなるんです」（明村）。

さらに同じ敷地では多くの障がい者や職員の方々が作業しており、休み時間には隣接している公園へ出て来られることもある。施設側とのコミュニケーションも密にすることで、今日はどんな作業を行っていて、いつ外への出入りがありそうかを把握した上で、工事日程を組んでいった。そうすることで、事故を未然に防ぐことができる。「近隣にハウス栽培で草花を育てられている農家が1軒あるのですが、風向きによっては、現場のホコリなどが降り注いでしまう可能性もあったんです。だから時には囲いを厳重にして工事作業を進めていきましたね」（明村）。近隣の人たちに最大限の配慮をする。必ず会ってコミュニケーションをとりながら、懸念点を洗い出す。そしてこちらから必ず改善策を出すと言う。工事が問題なくスムーズに進むことで、施工に集中でき、出来栄えにも影響する。

建物自体をしっかりとつくるのは当たり前。工事の影響や完成した後に建物を使用する人たちのことまで考える。それが製品・品質のグレードを上げ、デザイン性と居住性を両立させていくのだ。



明村 浩一
小柳建設(株) 建築第一工事部/係長

居住性を考えて、外壁材を提案したりもしました。また、デザイン性を保つために、見えない場所に裏板などを使用する工夫をしました。その分施工は大変でしたけどね(笑)。いつも思うことですが、完成に至るまで多くの方々から支えられ良いものが生まれます。

工事名:ワークセンターしらはす新築工事　発注者:社会福祉法人 白蓮福祉会　工事期間:平成25年3月21日～平成25年8月31日

8

クリオ府中新築工事

人生最大の買い物だからこそ、「満足かどうか」とことん突き詰める。

お客様のこだわりには、それ以上のこだわりを持って応える。

市街地の再開発事業計画が進められている東京都府中市。京王線府中駅の周辺には大國魂神社や東京競馬場がある。この場所からほど近くに建てられた14階建て新築マンション「クリオ府中」。この工事を請け負ったのが、小柳建設だ。

「新築マンション工事は過去にも経験があります。今回の工事では、工期を常に念頭に置きながら、前倒しでスケジュールを進めるようにしました。全体の工事規模は決まっていますから、職人さんが気持ちよく仕事ができるようにするためです。時期的にも、3月末のマンション竣工に関わる資材、職人、販売のピークからずれていたこともあり、資材の調達や、職人の人材確保にも頭を悩ませることはありませんでした。そんな中で、最も注力したのが『エンドユーザーのこだわりに徹底的に応えていくこと』でした」(小柳建設(株)／榎園香次)。

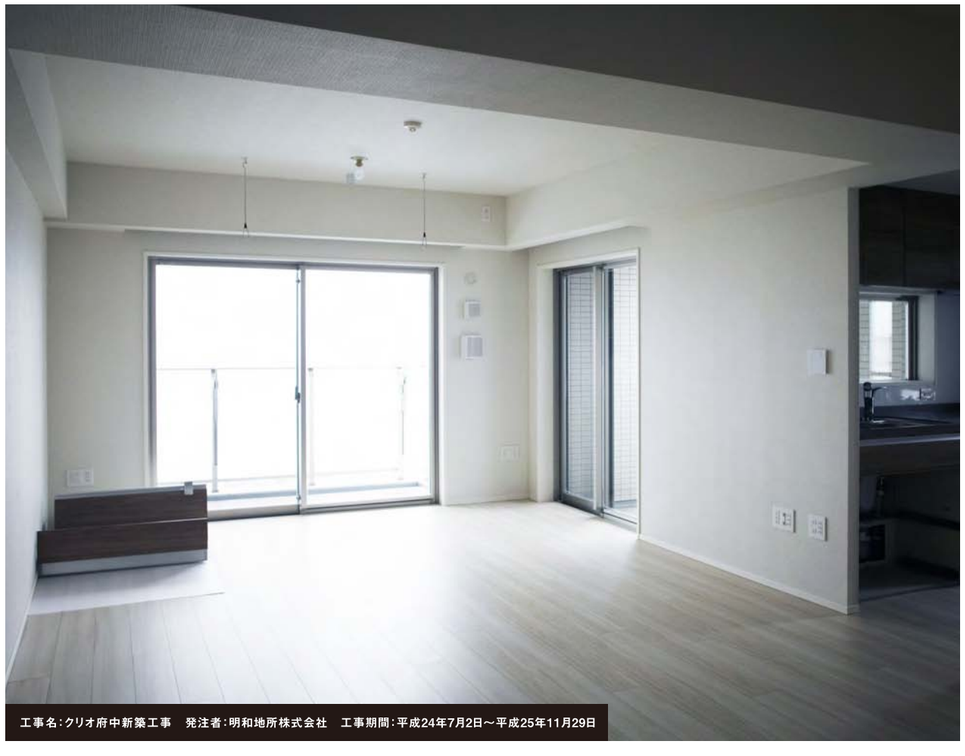
フローリングの種類やトイレの壁紙変更から、リビングに畳を置く特別仕様まで。クリオ府中は、モデルルームを見学した上で、細かく内装を選べるオプションがあった。こだわりを持つお客様の期待に応えるために、ミスは決して許されない。内装を担当する協力会社の方々との色の仕様や品物のチェックを入念に行うのは当然。それに加え、現場代理人の榎園は、内装工事の段階で何度もエンドユーザーとのやりとりを行ったという。

榎園 香次
小柳建設(株) 東京建築工事部/課長

こだわりの強いお客様はお話していて分かります。こだわりに対しては、こちらもそれ以上のこだわりを持ってやります。喜んで頂けたという声を聞くと素直に嬉しく思います。

「最大の目的は、お客様に安心して頂くためです。オーダーをした時のイメージと、実際の仕様にギャップがないかを確認して頂くのが一番ですから。直接工事現場にお越しいただいて、お客様の細かい要望を明確にすることができるんです。もちろん私たちとしては、『これで間違いない』という状態まで最善を尽くしています。それでも、人生最大の買い物。最大限に満足して頂きたい」（榎園）。

このような相手への気遣いは、直接的なお客様だけでなく、周辺の地域住民に対しても同様だ。ピーク時には1日に70人もの職人が立ち入ることもあった同現場。マンションの目の前には道路と歩道があり、頻繁に近隣の施設へ訪れる人々が通る。こうした通行人への挨拶や、安全管理も徹底的に行ったという。周辺住民の方々にはご自宅までお伺いして挨拶をして、日常的に声かけをすることで、ほとんどの人の顔を覚えるほど。「マンション工事で大切なことは、お客様が喜んでくれることに尽きます。国や行政ではなく、個人の方が非常に高価なお金を払って購入するものです。きちんといいものをつくることで、期待に応えていきたい」（榎園）。大きなものを作り上げる工事でも、「人」への細かい配慮を忘れない。そんな作り手の姿勢が、ずっとこの場所に住む人の満足につながるのだろう。



工事名：クリオ府中新築工事　発注者：明和地所株式会社　工事期間：平成24年7月2日～平成25年11月29日

9

関新やすらぎ堤耐震対策工事

どんな細かいプロセスも、人の生活を守る耐震工事の一部だ。

工事名：関新やすらぎ堤耐震対策工事　発注者名：国土交通省北陸地方整備局信濃川下流河川事務所　工事期間：平成25年2月16日～平成26年2月6日

花見シーズンを避けた工期、ダンプトラックの泥で道路を汚さない工夫。

今なお、記憶に新しい東日本大震災の記憶。千葉県浦安地域をはじめ、震源地から離れた地域でも、液状化の被害に悩まされた地域も多い。その液状化を防ぐ対策が地盤改良だ。東日本大震災の時でも、地盤改良を行った地域では液状化現象は見られなかったと言う。ここ新潟の地も、1964年の新潟地震の際に空港や信濃川近くの建物で大規模な液状化が発生。国内で「液状化」という現象が広く知れ渡るきっかけとなった。国土交通省北陸地方整備局信濃川下流河川事務所は信濃川の氾濫から住民を守るため、やすらぎ堤の地盤改良工事を決めた。その一部、500メートルあまりの長さを請け負ったのが小柳建設だ。河口から4キロほどのこの場所は、漁船が留まる係船場も近く、船の往来も多い場所でもある。また堤防に沿って多くの桜の木が植えられており、花見シーズンは多くの見物客で混雑する。また普段からも、散歩や通学で人の往来も多い場所だ。

「工事として、技術的にはごく一般的な工法を使っています。しかし工事はその作業以外にも近隣のみなさん、桜を見に来る人、そして漁船といろんな人達の生活に影響を及ぼしますので細心の配慮をすることも私たちの大切な仕事なんです」と小林（小柳建設（株））は語る。例えば、当初は3月頃からの工事開始予定だった工事を、信濃川下流河川事務所及びやすらぎ堤の占用者である新潟市の担当者と話し合い、桜の見頃を過ぎたGW明けからの工事にしたのも、大切な工事の一部だと言う。地域住民や漁業協同組合とも連携を密にすることで大きなトラブルもなく、スムーズに工事は進んだ。

そして、小林が責任者として気を配ったのが地域の共有物である道路を汚さないこと。堤防脇は多くの自動車が往来する道。そこにトラック専用の出口と工夫した洗車設備を作り、トラックのタイヤに付いた泥が自動で洗浄できるようにしたのだ。これで、普段往来する道路に泥は持ち込まれない。「もし道路が泥で汚れると、多くの人の車が汚れる。特にこの道を日常的に使う近隣のみなさんは、気になると思います。確かにこの工事は地盤改良ですが、ここにあるすべてのプロセスに気配りする事が我々の仕事なんだよね」（小林）。

この日は、まさに地盤改良の要である砂杭を打つ作業の最中。地質の状態に合わせて、1・8メートル～2・2メートル間隔で杭は打たれる。規則正しく打たれることで、堤防は強度を増していく。その後、完成断面の堤防を土で作り、そこに緑を植生させる作業に移る。ここまでくれば工事はほぼ完成だ。

多くの人が集う場所の、見た目ではわからない耐震地盤改良工事。人の命を守る重要な工事であることは言うまでもない。工事の一番の目的を果たすとともに、プロセスの細かいところにまで気を配り、何事も無く当たり前のようにやり遂げる。それが、小林のプライドだった。

小林 正志
小柳建設(株) 土木第二工事部/作業所長

工事はいつだって前倒し。契約工事期間は1月半ばまであるけど、12月になる前には終わらせたい。だって、いつ雪が降ってくるかわからないから。そうすれば、どんなことにも対応できるからね。

川の水を引き、トラックの土で道が汚れないよう出口に工夫を。

国道に水が流れ、汚れることがないように道の端を水が通る。

砂杭を打つサンドコンパクションパイル工法。近くにいても本当に静か。

砂を以って、砂を制する。絶対に液状化を起こさない技術力。

「技術的には一般的」と、責任者の小林も話す工事。そして楞田氏（株式会社不動テトラ北陸支店地盤工事部・工事課技術士）も「きわめてオーソドックスな工法」と口を揃える。しかし、その「一般的な工法」は、実は工事中の騒音に最大限配慮した「おもてなし」の技術でもあった。「この砂杭を打つ技術は、サンドコンパクションパイル工法という長い名前がついていますが、50年ほど前からある技術なんです。しかし、ほとんど騒音がなく砂杭を地中に打ち付けられる技術は、当社が15年ほど前に開発した工法です。近くにいても、いつ砂杭を打ったのかわからないくらいなんですよ」（楞田氏）。従来のサンドコンパクションパイル工法は、バイブロという機械を使用して砂杭を地中に打つ。これだと打ち込むときに「ドドドッ！」という大きな騒音と振動が工事現場だけでなく、近隣にまで響いてしまう。

そもそも液状化とは、地中の緩い砂が地震で揺れることで、砂と砂の粒子の間にある水分に強い圧力がかかり、それが周辺に拡散して、細かな粒子同士が離れてしまう現象のこと。この砂同士の結びつきに着目し、それを強化する意味で、砂杭を地中に何本も打ち込む。すると、砂同士の結びつきが強くなるので液状化が起きない地盤となる。「打ち込んだ3週間後に試験をするんです。ちゃんと砂の結びつきが強くなっているかどうか。今回も、もちろん大丈夫でした」（楞田氏）。

不動テトラは地盤改良で全国トップクラスの技術を持ち、全国各地で工事を展開している。工事場所の土質の状態に合わせて砂杭を打つ本数、深さが異なるため、部品同士を組み合わせ、現場で機械を組み立て、作業する。例えば地中に大きな岩があり、部品が壊れた場合でも、現場で対応できるようにしていると言う。作業が終わると解体してまた次の現場へ機械を送るのだそうだ。

「大きな地震が起きたとしても、ウチがやった現場なら絶対に液状化は起きない自信があります。そこは安心して欲しいですね。材料が砂なので、風の強い日の作業は大変なんですけどね（笑）」。多くの現場を経験してきた楞田氏の顔は、今回の現場でも充実感で溢れていた。

協力会社
株式会社 不動テトラ　北陸支店地盤工事部工事課
技術士（建設部門）／楞田 晃朗さん

〈新潟県優秀技術者表彰〉

いい人間関係こそが、いい現場を生むことを証明した。

平成23年の7月に新潟県を襲った集中豪雨によって、土砂災害の被害を受けたトンネル。山から崩れ落ちた土砂によって、上部のほとんどが削られてしまった。主要道路をつなぐこのトンネルを、現場代理人としてスムーズかつ高品質な復旧工事として推し進めた小柳建設(株)土木第三工事部の酒井祐一。この度、その功績を称えられ新潟県最優秀技術者として表彰された。災害復旧工事は、特に見栄えがいい工事ではないため、こうした表彰にはつながりにくいもの。表彰につながった理由を、酒井本人はこう話す。

「優良工事は、外部検査官の方と、現場の方で工事点数を評価します。今回は、現場の監督が非常に高得点をつけて下さりました。普段コミュニケーションをとっていた方からほめてもらえたのです。工事が終わったとき、監督から『災害復旧だと現場は煩雑になりやすい。でも酒井さんの現場はキレイだから仕事へのモチベーションが上がる。さらに、安全管理が徹底しているので、仕事に集中できました』と言って頂けました。発注者、地元の方との調整にも注力していたので、最終的にはいい人間関係、『コミュニケーション』を評価して頂けたのだと思います」(酒井)。

災害復旧はライフラインを整備すること。「使う人の役に立たなければ工事の意味はない」。そう語る酒井のまなざしは、さらなる高みを目指している。

〈小柳直太郎社長 黄綬褒章 受章〉

諦めない強い意志と誠実な心が、栄えある黄綬褒章へと導いた。

平成25年秋、経済産業省が発表する「業務に精励し、一般市民の模範である人」に贈られる「黄綬褒章」を小柳建設(株)代表取締役社長の小柳直太郎が受章した。秋の褒章は5種あり、合計で795名、新潟県央からは3名が選出された。

二代目社長の同氏は、平成元年38歳の時に社長に就任。上場直前と言われた隆盛期の直後、バブル経済崩壊に直面。「天地がひっくり返るような大災害のようだった」と当時の並々ならぬ苦境を振り返る。先代社長からの教えである、強い意志と誠実な心を持つことで、数々の試練を乗り越え、企業を立て直した。

太田昭宏国土交通大臣(左)と代表取締役 小柳直太郎(中央)・夫人(右)。

環境省の事業で取り組んだ皇居のお濠の浚渫工事では、一躍その技術力の高さが全国へと知れ渡り、また、自然災害の復旧活動でも地域のために大きな貢献をした小柳建設。

同氏は受章にあたり喜びを噛み締める。「大変名誉なことで、感激し、ありがたいことだと思っています。先代社長の父、そして父の同志として働いてくれた従業員、支えてくれた人たち、今もう亡くなっておられる方もいますが、そうした方々の土台があり、その土台の上に花を咲かせてもらったという思いです」(小柳建設(株)代表取締役社長/小柳直太郎)。

〈暴力団排除功労企業表彰 受賞〉

新潟県・県央地域で初の暴力団排除宣言。

1992(平成4)年に施行された暴力団対策法は、長い年月を経て徐々に浸透し、新潟県では2011年(平成23)8月より暴力団排除条例を施行、小柳建設の本社がある三条市は県の条例を受けて2012(平成24)年に排除条例を施行した。その後、小柳建設も社内でプロジェクトを発足。「私たちは準備を進め2013年6月26日にグループ会社や日頃お世話になっている協力会社を含めた安全大会を開催しました。ここで暴力団等反社会的勢力排除宣言を行い、新潟県暴力追放センターの専務理事をお招きし、勉強会を開催しました」(小柳建設(株)管理本部・法務担当管理官/丸山浩二)。具体的には、協力会社との契約約款に、「自社が暴力団ではないこと」、「嘘であった場合は契約を解除されても異議を申し立てを行わない」旨の条文を盛り込んで、改めて契約書の取り交わしを行っている。新潟県・県央地域の建設会社では初の宣言となり、これらの取り組みが評価され2013年10月22日、暴力団排除功労企業表彰を受賞するに至った。「暴力団排除は、企業にとって利益を上げることと同じくらい重要なこと。これは企業経営の危機管理の一環なのです」と、丸山は力強く語った。

表彰状

小柳建設株式会社 殿

貴社は関係事業団体と一体となって企業理念に基づく諸対策を積極的に推進し暴力団排除宣言を実施するなど暴力団追放意識の普及浸透に貢献されましたことにその功労をたたえ表彰します

平成二十五年十月二十二日

公益財団法人
新潟県暴力追放運動推進センター
理事長 敦井榮一

〈環境ボランティア参加(福島潟、西蒲原地区)〉

企業としての環境保全への意識向上、コミュニケーション促進の場。

平成25年4月13日、昨年に引き続き、「第34回福島潟クリーン作戦」に小柳建設の社員らが集まり、大橋下流の承水路や河川敷内の清掃活動、廃棄物の回収を行った。新潟平野に残された数少ない豊かな自然を持つ潟湖の保全を目的とした取り組みである。参加を通じて日頃からの自然環境への意識向上が図られた。

また、平成25年11月3日に行われた「西蒲原地区クリーン作戦」にも社員が勢揃いした。当日には社員が50名以上集まり、七穂排水路や新潟市南区吉江地先などでゴミ拾いを行い、地域貢献のために汗を流した。

環境保全事業部という部署を特別に設けるほど、企業として環境保護に真摯に取り組む小柳建設。こうした貢献活動にはこれからも積極的に参加していく姿勢だ。新入社員からベテラン社員までが広く参加する同プロジェクトは、家族を連れての参加者も目立ち、社員同士と家族間のコミュニケーションの場としても例年盛り上がりを見せている。

50人以上が参加した「西蒲原地区クリーン作戦」。

道をつくる。堤防をつくる。
マンションをつくる。
街の土台や景色をつくるのが
建設業の役割だとしたら、
たくさんの自然を
よみがえらせることも、
私たち建設業の使命だと思う。
人のために、
自然のために何ができるか。
とことん考え、
真っ直ぐに、貫いていきたい。

会社概要

社　名	小柳建設株式会社
U R L	http://n-oyanagi.com
本　社	〒955-0047 新潟県三条市東三条1-21-5　TEL.0256-32-0006
創　業	1945年（昭和20年）8月
資 本 金	3億5千万円
事業内容	1. 建設工事の請負、企画、設計、監理、およびコンサルティング業務 2. 不動産の売買、賃貸、仲介およびその管理ならびにコンサルティング業務 3. 住宅の建設および販売ならびに土地造成および販売 4. スポーツ施設、レクリエーション施設、健康増進施設等の保有、賃貸および経営 5. 労働者派遣事業法に基づく労働者派遣業務 6. 前各号に付帯する一切の事業
許可関係	国土交通大臣許可（特・般ー19）第13415号 / 一級建築士事務所 新潟県知事登録（イ）第4396号 宅地建物取引業 新潟県知事（1）第4894号 / 測量業許可（1）ー33094号 ISO9001:2008（品質マネジメントシステム）ISOQAR7276 ISO14001:2004（環境マネジメントシステム）ISOQAR7276 ISO27001:2006（情報セキュリティマネジメントシステム）SGS JP12/080230 OHSAS18001:2007（労働安全衛生マネジメントシステム）ISOQAR7276OHS001JP

事 業 所

本　社	〒955-0047 新潟県三条市東三条1-21-5　TEL.0256-32-0006（代）
本　店	〒959-1326 新潟県加茂市青海町1-5-7　TEL.0256-52-0008（代）
東京支店	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-9-3　TEL.03-3230-8578
新潟支店	〒951-8052 新潟県新潟市中央区下大川前通ニノ町2230-33-4F　TEL.025-223-8001
長岡支店	〒954-0124 新潟県長岡市中之島4156-8 TEL.0258-66-0007

村上営業所 / 新発田営業所 / 東蒲原営業所 / 機材センター（環境保全事業部） / 千刈事務所（舗道事業部）
田上営業所 / 燕営業所 / 柏崎営業所 / 魚沼営業所 / 上越営業所 / 岩手営業所 / 宮城営業所
福島営業所 / 茨城営業所 / 千葉営業所 / 横浜営業所 / 滋賀営業所 / 岡山営業所 / 東京工事事務所

健康増進・教育複合施設

ホワイトスイム秋葉スクール　〒956-0017 新潟県新潟市秋葉区あおば通1-6-17　TEL.0250-21-7888

関連会社

株式会社平成建設 / 北陸維持サービス株式会社 / 株式会社エステートコンサルタント

C S R

「BUILT ON」 小柳建設と街の人たちをつなぐ　CSRレポート2014

“BUILT ON”とは～を支える、～の基盤になるという英熟語。建設業は人の生活を支える基盤であり、
人のために働く使命感を持って仕事に携わっていく、という決意を題名に表しました。

経営理念

事業を通じて人類・社会の進化・発展に貢献すると同時に、全従業員とその家族の物心両面の幸福を追求し、誇りをもって会社を後世に伝えるものとする